連載 医療の現場から
闘いから共存へ
～病との新たなつきあい方～
聞き手・文／八木純子

言語の縛りなき未来へ

第70回
パソコンおたくが打ち破る壁 後編

NPO法人
地域診療情報連携協議会 理事長
株式会社C&T 代表取締役
瀧澤清美さん

「システム開発を通して医療に貢献したい」。中学時代の交通事故をきっかけに芽生えた思いをさまざまな活動に変えてきた前橋市の瀧澤清美さん。いまやプロジェクトは医療以外の分野にも及ぶ。C&T（Communication & Technology）で「言葉の壁」を取り除き、世界をつなぎたい。困っている人を一人でも多く支えたい。瀧澤さんの夢は、着実に実を結びつつある。

――多言語プロジェクトのそもそもの始まりは、遠隔医療を支援するシステムを作ったことだそうですね。

コロナ禍でメディカルインバウンドも影響を受けましたが、今後はまた増えていきます。でも、日本で治療を受けて自国に帰ってからのフォローアップが、通訳を介さないとできないのでは困りますよね。

そこで作ったのが、即時通訳システムの「remote-connect」です。ホストとビジターが自分のスマートフォンやパソコンでQRコードを読み込むかリンクをクリックしてシステムを起動し、それぞれが「呼び出し／コール」ボタンを押すことでビデオ通話ができます。相手の言葉が自分の言語に自動翻訳されて字幕で表示され、同時に合成音声でも流れるので、異なる言葉を話す人同士だけでなく、聴覚言語障害がある人もコミュニケーションできます。

昨年、「日本DX大賞」というビジネスコンテストに「ことばのかべを無くすプロジェクト」と題して応募したところ、官民連携部門で準グランプリの優秀賞を受賞しました。第三者に評価され、必要なんだと認められることによって、社会還元ができるのだと実感しました。

――この技術を応用し、セルフ通訳システムも開発されました。

通訳を自分のデバイスに入れてしまおうというコンセプトで作ったのが「self-trans」です。訪問国の言葉を自分で理解するためのツールで、会話をする2人がそれぞれのスマホでQRコードを読み込みシステムを起動してマイクに向かって話すだけで、互いの言語が母国語に翻訳されリアルタイムで字幕と音声が表示されます。

海外旅行の際、たとえば相手（ビジター）の言語を英語に設定してヒアリングモードでスマホにイヤフォンマイクをつけておけば、ポケトークのように毎回ボタンを押さなくても、電車のアナウンスなど、聞こえてくる英語をすべて自動で日本語に通訳してくれます。お店や駅、空港などにQRコードを設置しておくだけで、お客様は無料で使うことができます。

▶self-transのデモンストレーション風景

字幕と音声で同時通訳

この1対1のセルフ通訳を複数言語に同時対応できるようにした世界初のシステムが、「guide-trans」です。たとえば10ヵ国の観光客にガイドさんがスマホのマイクを通して日本語で話すと、10人それぞれのスマホにリアルタイムで母国語の字幕と音声が表示されます。最大256人に同時通訳できるため、国際会議などで使うにも便利です。

3つのシステムはすべてパソコンとiOS／Android端末で使用でき、世界約130の国と地域の61言語に対応しています。フランスとスペインのバスク地方で使われるバスク語などもありますよ。翻訳された文字はすべて保存可能。ウェブアプリなのでダウンロードもID・パスワードも不要です。

――これは、医療機関や観光業だけでなくあらゆる場面で使えそうですね？でも、通訳さんの仕事がなくなっちゃったりして（笑）。

それで通訳者からは嫌われています（笑）。いま公立の小中学校で、日本語がわからない外国人児童が増えてきているんですが、1人1台配られている端末でguide-transを起動して先生のしゃべる言葉を自分の言語で見たり聞いたりできれば、授業への理解も深まりますよね。

日本で生活する外国人が一番困るのは、災害時にテレビやラジオで流れる避難のアナウンスがわからないことです。でもスマホやタブレットをテレビのそばに置いてself-transを使えば、ニュースがそのまま字幕になります。

この3つのシステムがあれば、世界がつながるんです。いまはインターネットインフラで使う形ですが、近い将来には固定電話でも実現したい。スマホユーザーは全世界に40億人いますが、電話インフラなら80億人が使えるようになります。世界中の人と自由に話ができちゃうなんてすごくないですか？

――すごすぎて実現が待ち遠しい！瀧澤さんをこうしたシステム開発に駆り立てる原動力は何ですか？

12年のサラリーマン生活を終えて独立し、IT系の会社を立ち上げましたが、経営に失敗して2001年に会社が倒産。妻と心中を図り、未遂に終わりました。その後NPOの仕事などを続けるかたわら、2007年、群馬大学に新設された生命医科学の大学院に50歳で入学しました。パソコンおたくが初めて医学を勉強したことになります。卒業して群馬大学医学部附属病院の研究員となり、国際医療と遠隔医療の研究で得た知見をもとに、10年前、システム開発会社のC&Tを作りました。

必要としてくれる人のため

振り返ると本当にいろんなことをやってきました。でも何一つ無駄なことはなかったと思っています。僕はいままで3回命拾いしているんですよ。中学で交通事故に遭った時と自殺未遂をした時、それから2011年に心筋梗塞を発症した時。3回生き延びたということは、自分が世の中でやらなきゃいけないことがまだあるんだろうなと思うわけです。僕が作るシステムによって助かる人がいる、それが原動力かな。必要としてくれている人たちがいるから、頑張ろうと思えるんです。

僕の夢は、130ヵ国の国と地域＝世界の90％の人たちがそれぞれの言葉で交流できるようになること。世界から言葉の壁をなくす――そうすれば不平等もなくなって、もっともっとみんなが幸せになれる――これが最終目標です。